兵庫県政150周年記念事業・開館記念展2

三彩の俑(よう)たち 唐王朝のたたずまい

平成29年9月7日(木)～平成30年3月13日(火)

企画展解説シート　第2号

兵庫県立考古博物館 加西分館
古代鏡展示館
Hyogo Prefectural Museum of Ancient Bronze Mirrors

三彩天王俑（高100cm）

三彩文官俑（高87cm）

唐三彩

三彩とは、白色の粘土を成形し、素焼きした後、複数の釉薬(ゆうやく)を施し、900℃前後の温度で焼成した陶器である。特に7世紀後半、唐の時代に成立したものを唐三彩と呼ぶ。

制作されたものは、主に明器(めいき)（死者のための副葬品）として用いられた。

唐三彩がさかんに制作されたのは、唐王朝の国威が最盛期を迎えた8世紀初頭～半ばである。この時期は銅鏡の優品が数多く制作された時期とも重なり、華やかな貴族社会を象徴するかのようである。

俑(よう)

俑とは、冥界(めいかい)に暮らす貴族に仕える人々を模した人形(ひとがた)である。唐代の俑の多くは、三彩に彩られ、当時の人々の装いを今日に伝える。

天王俑は、墳墓を邪気から守る武人である。鳥を形どった冠をかぶり、鎧を着用する。憤怒の表情をみせ、足元で牛を踏みつけるその姿は、仏教の守護神である天王を思わせる。

文官俑は、袍(ほう)（出仕服）を着用し、両手を幅広い袖に入れ、胸元に置いている。儀礼の場にいるかのように直立し、まっすぐ前を注視している。

西から来た動物たち

褐釉馬（高78㎝）

天翔ける駿馬

褐釉（かつゆう）により毛色を表現した馬。

馬は、交通や軍事など人間にとって身近な動物であり、中国西方の中央アジアは体軀に優れた名馬の産地だった。平和で豊かな唐の時代、貴族は名馬を飼育し、乗馬を楽しんだ。

有翼馬ペガサスの意匠もシルクロードを介して伝わった。その姿は、仙界を翔ける天馬として鏡のモチーフにもなっている。

ペガサスが表現されている鏡
（蓮上双天馬紋八花鏡）

加彩駱駝（高67㎝）

砂漠の舟

顔料により彩色された駱駝（らくだ）。

西域からは物資だけでなく、様々な情報や文化がもたらされた。元来、中央アジアの乾燥地帯を生息の場とする駱駝は、シルクロードの交易に欠くことのできない動物だった。

駱駝の背に左右に振り分けられた荷駄袋には、貴族たちの興味をひく西域の品々が入っているのかもしれない。

編集・発行：平成29年9月7日　兵庫県立考古博物館加西分館
兵庫県加西市豊倉町飯森1282-1　TEL：0790-47-2212
29教Ⓟ2-019A4